

第4回 田中昌人記念学会賞の選考結果について

第4回田中昌人記念学会賞選考委員会

委員長：井上千一，副委員長：水谷勇、菊池芳明、安東正玄

本委員会は、推薦のあった下記2名について慎重に審議した結果、両名とも田中昌人記念学会賞にふさわしい業績を有すると判断し、推薦するものである。

【受賞者と受賞論文】

岡山 茂（早稲田大学）

（2014）『ハムレットの大学』新評論（四六判上製 304頁）

西垣順子（大阪市立大学）

（2014）「教養教育の到達目標に関する検討—「可逆操作の高次化における階層—段階理論」による青年期の発達保障の観点から—」『現代社会と大学評価』（大学評価学会年報）第9・10合併号、pp.143-161.

【受賞理由】

岡山茂会員の専攻はフランス文学であるが、アレゼール日本（高等教育と研究の現在を考える会）事務局長を務めるなど、高等教育や大学評価の在り方に一貫して関心を向けてきた。これまでも、共著（2003）『大学界改造要綱』（アレゼール日本編、藤原書店）、共訳書 C. シャルル、J. ヴェルジェ（2009）『大学の歴史』（白水社）などを公刊している。対象著作は、岡山氏のこれまでの論考を整理し編み直された単著であり、「法人化」「ネオリベラリズム」「グローバリゼーション」「重点化」「職業準備の場としての大学」「教養」「真理と正義」「条件なき大学」などのキーワードから、危機にある大学を多角的に照射し、再生の糸口を探ろうとするもので、大学評価研究に貴重な問題提起をなした好著である。

西垣順子会員の対象論文は、本学会年報第9・10合併号に掲載された査読付投稿論文で、生涯発達における大学生期の位置付けを整理した上で、教養教育科目の授業の到達目標に関する質問紙調査の結果をもとに、教養教育とその評価のあり方について検討したものである。本論文では、大学生期（18-22歳頃）の発達を「自分自身が発達をしながら社会をも発達させていくというものであり、現在の社会への一方的な適応ではない」ことから、教養教育には「学生が自分自身の発達と社会・世界・自然を統合的に学ぶこと」が期待され、「価値を見つけ出したり作り出したりする体験が必要で、それには仲間や第三者との連携、協働体験が不可欠」としている。こうした指摘は、短絡的な成果を求める近年の人材育成・職業教育・キャリア教育の政策展開についての批判的検討に際し、有効な分析視点を呈するものであろう。「大学評価京都宣言」で「大学評価の基本に、学生の発達保障が明確に位置づけられる必要がある」として、本学会は設立以来、学生の発達保障を踏まえた大学教育や大学評価のあり方を検討しており、本論文はこうした本学会の基本姿勢と合致する成果である。

両名の研究成果は、全く異なるものではあるが、それぞれに学会の基本姿勢と合致する貴重な成果であり、第4回田中昌人記念学会賞の受賞にふさわしいものと、審査委員一同判断した。